

佐賀新聞 2014(平成26)年10月7日(火)

岡田名画の
周辺

明治30年7月、文部省の第1回留学生に選ばれた岡田三郎助はパリに赴く。黒田清輝と久米桂一郎の紹介状を携え、すぐさま画家ラファエル・コランの門をたいた。コランの夏の別荘はパリ郊外のフォントネーオロースにあり、まずそこに住まわせてもらい、コランの外光表現「屋外の光を積極的に画面に取り入れる画法」を学び始めた。

コランは自然の柔らかく、穏やかな光の下に佇む女性像を得意とし、作品は別荘の屋外の庭で描かれることが多かった。しかしその制作現場は秘密に包まれていた。特に女性をモデル

① フランス留学

にした現場は、岡田にも見せることはなかったという。

ところがある日、岡田は偶然にも庭のわずかに開いた木戸口から、秘密の現場を見ることになる。そこには木陰に置かれたベッドに、空を飞翔するかのようなポーズを取りながら横たわる女性(モデル)の姿があった。そしてその光景は「薄ドンヨリとした緑の調和とおだやかな光とに包まれて、何とも言えぬ落ち着いた」(『夏期のコラン先生』美術新報、大正5年)印象だったという。

モデルポーズそして色調は、まさにコランの作品そのものだった。岡田によれば時間にして「ほんの五、六秒」の出来事だったが、これが若き岡田が自身の進むべき道を確認した瞬間ではなかったろうか。自然と光、そして人物・女性を、繊細

かつ穏やかな色彩の中に調和させて描くこと。この師の技(技術)と心(美意識)を忠実に学んだことが、帰国後の岡田の画風と評価を決定づけていく。

技を学び、心を受け継ぐ



フラ・アンジェリコの作品を岡田が模写した『聖母戴冠図』=明治34年(東京国立博物館蔵)



コランの柔らかな色彩感覚を受け継いだ『臥裸婦』=明治34年(石橋財団ブリヂストン美術館蔵)

その後、岡田は次第にコランから離れ、独自の学びを始める。ルーヴル美術館で名画の模写に励むなど、ヨーロッパの古典絵画の美についても実に丹念に学んでいる。またこの頃から、後に語り草となるほど情熱を傾けることになる工芸品の収集も始めている。4年以上に及んだ岡田の留学生活は、彼の性格とおりの「マイペースで貪欲」な毎日であったようだ。(県立美術館学芸員・野中耕介)

県立美術館で11月16日まで開催中の岡田三郎助展に合わせ、同館の学芸員に名画にまつわるエピソードなどを紹介してもらいます。随時掲載。

岡田三郎助 — エレガンス・オブ・ニッポン 11月16日まで県立美術館で